

# 韓国における外邦図（軍用秘図）の意義と学術的価値

ナム ヨンウ  
南 榮佑（韓国、高麗大学）

## I. 序論

韓国で最も尊敬を受けている地理学者は古山子 金正浩である。彼は韓国の近代の地理学者として青邱図・大東輿地図・地球図・海左全図・道里道標名などを製作している。これらの中でとくに青邱図は1834年に製作された縮尺約13万3,333分の1の方格図であり、大東輿地図は1861年に製作された、縮尺16万分の1の方格図である。しかしこれらの地図は、現代地図の観点から見ると、正確度については精巧さが欠如しており、また経緯線を導入しなかったという点で高く評価することは出来ない。

地図の歴史は、人類のもっとも貴重な文化遺産の一つと認定されている文字の歴史よりも長いものである。甚だしい場合、文字を持っていない未開な民族でも地図は持っていた。地図に載せられた地理的情報は、人間生活を営むために必ず必要な存在であった。地図には人間に必要な各種の情報が載せられており、彼らの生活観と世界観、あるいは宇宙観が盛り込まれて表現されており、彼らの価値観と人生観が記録されていると言っても過言ではない。そういうわけで、たとえ前近代的な地図であるといっても、その中には人間に関するすべてが乗せられていると考えることが出来る。

## II. 外邦図（軍用秘図）の意義

### 1) 地図名の問題

日本の陸地測量部から1921年に刊行された『陸地測量部沿革誌』によれば、日本ではいわゆる「外邦図」という呼称が、日本国内の地図という意味の「内国図」の対語として使用されている。このような外邦図という特定の名称は、1884年に日本の参謀本部測量局が設立されたとき、「測量局服務概則」の第5条と第6条で使用されたのが最初のものである。その後、日本は第二次世界大戦中に侵略対象国の地形

図を製作し、これを外邦図と呼んだ。

外邦図の歴史は1世紀にもおよび、清水靖夫(2003)は、地図の性格によって便宜上、外邦図類(第二次世界大戦以前に作成された地図)と外邦図類(第二次世界大戦以降に作成された地図)に大別した。外邦図類はすでに内邦化された地域と侵略対象地域とに区分され、それぞれ類-1と類-2に細分した。そして外邦図類は東南アジア、太平洋諸島、北アメリカの一部を含むものであった。これらの中で韓半島(朝鮮半島)の地図は外邦図類-1に属する。

地図の製作を主管した日帝参謀本部は1872年から韓半島(朝鮮半島)に対する諜報活動を開始し、1894年から始まった測量作業においては200~300名の参謀本部要員から構成される間諜隊が密かに派遣された。その後、12年後の1906年までに測量を終えた地形図は目測で短期間に製作された地形図であったため、「目測迅速図」と呼ばれた。全484枚の地形図の中で大部分のものは1895年から1899年間に測量された。この時期は韓日合併(日韓併合)が断行される11~15年前に相当する。日本帝国は当時独立主権国家であった韓国に対し、陸軍参謀本部が中心になって国際法を破る不法行為を犯していたことになる。

この目測迅速図は、咸鏡北道・平安北道・江原道の一部および済州道と釜山・元山などが欠落しており、韓半島(朝鮮半島)全体を網羅することは出来ないが、主要部分はほぼすべて含まれている。韓日合併(日韓併合)以後に製作された5万分の1地形図は全部で722枚の地形図からなり、この地図は韓半島(朝鮮半島)の約61%に相当する地域を測量し、製作したものであることがわかる。このように、陸軍参謀本部は緊迫の度を増す北東アジアの情勢のために急いで地図を作成するために略式地図を製作した。そういうわけでこれらの地形図は「略図」または「朝

鮮略図」と呼ばれた。

このように、いわゆる朝鮮の外邦図が迅速図・目測図・略図などと呼ばれるのはそれなりの理由があった。日本は明治維新以後に北海道の測量作業を展開し、地図作成のノウハウを蓄積するにいたった。日本はすでに 1884 年に、迅速図と仮製図を製作し、短期間に地図を作ることの出来る能力を養った。そしてこの地図を略図と呼ぶのは、これが短期間に迅速かつ隠密に作り上げられた迅速図であるからである。しかし測量技師のスケッチで作った略図だからといっても、最大限正確であってこそ地図相互の誤差を最小化することが可能となる。スケッチに依存する目測図は観測地点から目標物が遠ければ遠いほど方向の誤差が蓄積して大きな誤差を発生させる。そして距離に測量が不可能な場合は、歩測に依存するか目測によって測量した。それゆえにこれらの地図を略式目算測図と呼ぶことが出来る。

日本帝国は韓半島（朝鮮半島）の占領はもちろん、日清戦争とロシアの南進政策に予め備えるために、1895 年に臨時測量班を韓半島（朝鮮半島）に派遣し、縮尺 5 万分の 1 の地形図を刊行しようとしたが難関にぶつかり、1896 年に測量作業を中断したとされている。しかし実際にはそれ以前から日本陸軍参謀本部所属の諜報員たちが韓半島（朝鮮半島）に派遣され、地図製作のために情報収集を長期間にわたって隠密に行っていたのである。このようにして収集された情報をもとに 1890 年代に入ると本格的な準備作業に着手し、1906 年までに 5 万分の 1 地形図を刊行するための測量作業が完了した。この地図は日本の陸軍参謀本部が軍事目的で秘密裏に製作した地図であり、「軍用秘図」と呼ぶのが妥当である。日本で『韓国古地名の謎』を著述した光岡雅彦（1982）も、やはりこの地形図を軍用秘図と呼んだ。

## 2) 韓国地図発達史の見直し

韓国には三国時代以前はもちろん、統一新羅時代に至るまでの間、いかなる地図が使用されていたのか詳しく見ることの出来る実証的な資料がほとんどない状態である。ただ漢書・後漢書・三國志・魏書・周書・隋書・唐書のような中国の史書に韓国の地理的情報が記録されているだけである。高麗時代には

以前に比べてはるかに多様な地図が製作されていたものと推測されるが、それに対する具体的な記録は多くない。文献の上で登場するのは 1148 年の高麗地図をはじめとする高麗末期の季詹の三國地図、羅興儒の本国地図などがあるだけである。

以上に言及したように、韓国には朝鮮王朝時代以前に製作された地図の中で現存するものはほとんどない状態である。地図の保存が難しかった理由は、外敵の侵入のために戦乱が頻発し、消失したためである。そういうわけで韓国の古地図は、その大部分が朝鮮王朝時代以降の地図が現在まで伝えられてきただけである。現存する朝鮮王朝時代の地図としては 1402 年に季蒼が作った八道図が最古であり、1432 年に尹淮・申檣などが編纂した新撰八道地理志、1451 年の兩界地図などがある。その次には東国輿地勝覽に添付された八道總図と八道各図などがあり、朝鮮王朝時代後期に入ると鄭尚驥の東国地図と、これを継承した申景濬の東国輿地図をはじめ、韓国の地図の歴史の中で最も際立った業績を残した金正浩の青邱図と大東輿地図などがある。

金正浩の地図を最後に、韓国の地図の伝統は途絶えてしまった。韓国はその後を継いだ大韓帝国の終焉により、日帝時代に入った。現在までの韓国の地図学の歴史においては、日本の陸軍参謀本部の陸地測量が 1910 年から 8 年余りに及ぶ作業の後に 1918 年に完成した 5 万分の 1 の地形図が最初の地形図であると考えられてきた。しかし筆者はその地形図が製作された 1910 年時代以前にも日帝が韓半島（朝鮮半島）で測量作業を行ったことがあるという事実を明らかにしたことがある。筆者の大学時代、ソウルのある古本屋で偶然発見された何枚かの地形図が物証になった。その地形図には当然なければならない測量年度と凡例が注記されていなかった。当時、筆者はそのことを異常だと思ったが、その地形図の全体について詳しく知ることはなかった。

それから約 20 年がたった後、筆者は日本の国会図書館の地図室に略図または朝鮮略図と呼ばれる韓半島（朝鮮半島）最初の地形図があることを発見した。それは 1991 年 7 月のことであった。光岡（1982）の研究が決定的な契機となった。この地形図は 20 年前にソウルの古本屋で発見したもと同じ地図であった。

そういうわけで、日帝参謀本部によって製作された5万分の1の地形図は全部で3種類ということになる。第一次の地図は軍事用に秘密に作られた軍用秘図といえる略図であり、第二次の地図として刊行されたものは韓日合併(日韓併合)直後に略図を修正した朝鮮地形図、そして第三次の地形図は三角測量によって正式に製作された朝鮮基本図である。ゆえに第一次および第二次の地形図は略式目算測図に該当する地図とすることができる。

### Ⅲ. 外邦図(軍用秘図)の学術的価値

#### 1) 朝鮮末期の地理的景観研究

1906年に台湾の土地調査を主管した熊田信太郎が韓国に到着し、測量技術者たちの養成と測量訓練を実施し、土地調査事業を推進するための総合的基本計画を樹立した。1910年には土地調査局が朝鮮総督府に開設され、1912年には土地調査令が制定されて朝鮮民事令・不動産登記令などの関連法が公布された。土地調査事業を完了した日帝は、各種建設事業を展開していった。まず何よりも先に鉄道敷設事業に着手し、次に港湾事業が実施された。その後は道路・水利事業と治水事業の順で進行した。こうして韓半島(朝鮮半島)には従来には見られなかった新道路と呼ばれる道路をはじめ、鉄道・橋梁・ダムなどが見られるようになった。特に鉄道が通る駅舎の周辺には新しい集落中心地が形成された。しかしこれとは別に、鉄道路線から疎外された伝統的中心地の中には衰退の道をたどるものもあった。一方、海岸部では大規模な干拓事業が展開され、地下資源が埋蔵されている山岳地帯には鉱山村が形成された。これらに伴い、韓国の国土景観は大きく変わった。しかし朝鮮略図には日帝によって変えられる前の国土景観が描かれており、韓半島(朝鮮半島)の元来の姿を復元することができる。

それにも関わらず、黄海道から平安南道と平安北道に至る地形図には京義線鉄道が描かれているという事実を朝鮮略図において確認することができる。京義線は1900年に韓国政府の「鉄道自力経営方針」によって鉄道院が設置され、1902年に着工された。ロシアに宣戦布告した日本は軍需品の輸送に必要な鉄道を確保するために、1904年2月に臨時軍用鉄道

監部を組織し、その年の3月に起工式を行った。平壤付近を経由する京義線は1905年1月に竣工された。ここで筆者は一つの疑問を抱いた。平壤付近の地形図はすべての図について明治28年式の図式と書かれていることから、1895年から1900年の間に測量されたものであるとわかる。しかしこの間には鉄道は敷設されなかったことから結局のところ、1911年に発刊され、一部の内容が追加された第二次の地形図であると判断するしかない。

以上のような事実を勘案して朝鮮略図を分析すれば、朝鮮王朝時代末期の韓半島(朝鮮半島)の地理的景観を把握することができるであろう。

#### 2) 古地名研究

韓国の第一次地形図に該当する軍用秘図は、密偵隊が隠密かつ迅速に測量したものであり、正確度においては劣っているが、韓国古代の地名・言語・歴史の一面を解読する手がかりを提供してくれる。この地形図の地名は訓読名・古訓読名・古借字名で表記されている場所が大変多い。朝鮮王朝時代の末期でも韓国の地名は漢字表記が大部分であり、音読主義に立脚した

上での純粋な韓国語の地名を知ることはできなかった。もちろん一般の人々の間では韓国固有の地名が使用するにはされていたが、その記録が残っているものはないようである。

例えば江原道春川の前坪と後坪の場合、朝鮮総督府が製作した第三次の地形図には前坪がチェンピョン、後坪がフ・ピョンと記載されている。しかし軍用秘図である第一次地形図には各々アプトル、テートルと注記されている。そしてソウルの漢江の河辺にある粟島と西大門区の新村の場合、第三次地形図には各々ユルド、シンチョンと注記されている。これらはすべて漢字の地名が音読主義によって発音されたものである。これらの韓国語地名は軍用秘図には各々セーマル、パームソムと注記されている。ここで論じた前坪・後坪と新村・粟島は軍用秘図にはすべて訓読名で表記されているという点で注目される地名である。平地を意味する「坪」は日本では「鶴」、韓国では豆老と借字される。これらは韓国語では「ツル」と発音され、「   」と表記される。同様に新村の

表1. 第一次地形図と第三次地形図の地名比較

地名	図葉名	第一次地形図		第三次地形図	
		測図年	地名表記	測図年	地名表記
前坪( )	春川	明治28年(1895)	アプトル	大正5年(1916)	チェンピョン
後坪( )	"	" "	テートル	" "	フーピョン
新村( )	ソウル	明治28年(1895)	セーマル	大正5年(1916)	シンチョン
栗島( )	"	" "	バームソム	" "	ユルド

「新」はセ、「村」はマルと訓読される。そして栗島の「栗」はバム、「島」はソムと訓読される。これらは日本語の「むら」、「しま」などと関連した単語である。ゆえに韓国語および韓国古代語は日本語の語源研究を行う上で必ず解明しなければならない課題である。

このように軍用秘図の地名は、当時国内において密偵たちが隠密かつ迅速に調査したものであり、その正確度には欠点が多い。特に密偵たちは韓国語の発音が難しいために現地の地名を正確に記載することができなかった。そういうわけで参謀本部は韓国人を語学留学生の名目で測量局の修技所に入所させ、測量技師として活用するというこもした。しかし韓国の地名を日本語の仮名で正確に表記することは不可能なことであった。それにも関わらず、軍用秘図の略図は韓国の古地名の一断面を解明する手がかりを提供してくれる。この地形図に注記された地名の中では訓読地名・古訓読地名・古借字地名が比較的多い方である。この地形図の地名を分析したところのある光岡雅彦(1982)によれば、略図に記載された地名のうち、約20%程度が古訓また古借字地名として表記されているという。彼は支石基のような古代の遺跡との相関性を勘案すれば、韓国の古代の習俗まで窺うことのできる地名が多いと主張した。そういうわけでこの略図は民族学的・言語学的・考古学的検討が後に続けば、韓半島(朝鮮半島)一帯の古訓と古方言を究明できる資料として評価されよう。さらに進んで韓日古代史の観点から韓日古代語の地域的特性を考察することができ、韓国の古代の地名

が日本の地名に及ぼした影響までも把握することができるであろう。

#### IV. 結論

これまで詳しく見てきたように、日本で外邦図と呼ばれる朝鮮略図は、軍事的目的により日本の参謀本部が秘密裏に作成した軍用地図であることに間違いない。日本で言う「外邦図」という地図名は、多分日本中心的な視角から見た名称である。内国図と対比する名称として使用されることは理解できるが、これらの地図が過去の苦い歴史を内蔵しているという点と、隣国に配慮するという次元から再考されるべき必要がある。

ゆえにこのような地図の場合は、韓国のみならず中国・台湾のようなアジア各国の地図を網羅できるようなグローバルな名称に変えることが望ましいと考えられる。

本地図はアジア・太平洋地域の学術資料として公開する場合、関係諸地域の研究者たちに多くの助勢をもたらすことが期待される。特に明治時代に測図された韓国の地形図は朝鮮王朝末期の地理的景観を復元したり、古地名を研究する時に大きな助力となり、民俗学・言語学・考古学の研究においても参考資料として利用価値があると言えよう。

#### <参考文献>

- 国立建設研究所, 1972, 韓国地図小史.
- 金儀遠, 1983, 韓国国土開発史研究, 大学図書.
- 南榮佑, 1992, “日本参謀本部間諜隊による兵要朝鮮

- 地誌及び韓国近代地図の作成過程”, 文化歴史地理, 第4号, pp. 77-96.
- , 1995, “日本参謀本部間諜隊による韓国近代地図の作成過程”, 殉国, 第49号, pp. 10-21.
- , 1996, 80年前の地形図から見た郷土景観, 郷土社.
- , 1997, 舊韓末韓半島地形図, 1巻-4巻, 成地文化社.
- 李鎮昊, 1989, 大韓帝国地籍及び測量史, 土地.
- , 1993, “日帝の韓半島測量侵略”, 領土サラ, 創刊号, pp. 147-183.
- 光岡雅彦, 1982, 韓国古地図の迷, 学生社, 東京.
- 陸地測量部編, 1921, 陸地測量部沿革誌, 陸地測量部, 東京.
- 朝鮮総督府鐵道局編, 1937, 朝鮮鐵道史, 第1巻, 朝鮮総督府, 京城.
- 中野尊正, 1967, “日本の近代史(明治以後)”, 地図学, 朝倉書店, 東京.
- 参謀本部編, 1888, 参謀沿革誌, 第一号.
- 参謀本部, 1921, 参謀沿革誌, 第二号.
- 清水靖夫・1986・“日本統治機関作製にかかる朝鮮半島地形図の概要”, 朝鮮地形図集成解題, 柏書房, 東京.
- 清水靖夫, 2003, “外邦図の嚆矢”, 外邦図研究ニュースレター, No. 1, 外邦図研究グループ, pp. 21-23.
- 村山勝彦, 1981, 朝鮮地誌略 I : 隣邦軍事密偵と兵要地誌, 龍溪書舎, 東京.
- Young-Woo Nam, 1995, Japanese Military Surveys of Korean Peninsula, 1870 - 1899, *Journal of Education*, Vol. 20, pp. 145-154.
- Young-Woo Nam, 1997, Japanese Military Surveys of Korean Peninsula in Meiji Era, *New Directions in the Study of Meiji Japan*, Brill, Leiden, pp. 335-342.